

# 額田王と熟田津

「熟田津」私考

菊池 佐紀



熟田津歌碑（松山市護国神社）

齊明七（六六一）年、齊明女帝は中大兄皇子らを伴い、百済救援のための大船団を率いて難波の宮を出発し、途中、伊予国の熟田津に着く。更に博多港に向かう夜の船出の神事の席で、額田王によって祈歌が披露された。

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかないぬ今はこぎ出でな

（万葉集卷二）

熟田津の津は港を意味し、古代伊予の海港であるのに間違いないが、現在のどの位置に当たるのか諸説が分かれていて不明である。松山市の堀江、和気、三津海岸が最も有力視されているものの確証はなく、憶測の域を出ない。

生年と歿年共に詳らかではないが、万葉集に秀歌十三首を残す額田王は宮廷の神事に仕える巫女であり、恋多き情熱の歌人として名高い。十五歳で大海人皇子（のちの天武帝）と結ばれ一女をもうけたが、皇子の実兄、中大兄皇子（のちの天智帝）に見染められ、新しい恋人の許へ走る。しかし実際には三角関係はずつ



堀江海岸から和氣を望む



和氣港

と続いていたという。女性の貞操観念は江戸時代に中国から儒教が入ってから植え付けられたもので、古代では複数の異性関係は珍しいことではなかったらしい。

天智天皇主催の宮中の宴の折に二人が取り交わした歌がある。  
あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

額田王  
紫のほへる妹を憎くあらば人妻ゆえにわれ恋いめやも

大海人皇子  
私はこの大海人皇子の歌がとりわけ好きである。王朝的頹廢の漂う、この美しい「不倫の歌」は蕩けるようなエロスを感じさせる。

天智天皇崩御のあと、大海人皇子は壬申の乱を起こして勝利し、直ちに即位して天武天皇となる。実兄に妻を奪われた恨みをようやく晴らしたわけだが、その時、四十半ばを越えていたという額田王がどういう晩年を過ごしたのか歴史は一切伝えていない。

美貌で、古代では稀な新しい個性の持ち主額田王が熟田津の浜辺に立って、航海に赴く兵士たちを鼓舞し



伊佐關波神社

たという前掲の「熟田津」の歌は、むしろ男性的な思惟と強い意志に満ちた氣迫が漲っていて、祀神の役目を担っていたにふさわしい秀歌だと思える。が、私には疑問が残る。果たして彼女は船出の間際にこの折歌を詠み上げたのかどうか。  
和氣堀江の狭隘な海に四百艘もの船を浮かべること自体無理があるし、夜中に月の光を頼りに船出する

伊佐關波神社の石段



ことは航海技術の未熟な古代には危険度が多く納得がいけない。これが潮流が激しく渦を巻く、魔の海域と呼ばれる来島海峡ともなると別だが、地形潮流共に穏やかで波静かな和氣の海で、「今風いでいるから潮時だ、それ行け！」と激励したところ、折角の名文句は生きてこないのである。絵画的で勇壮なこの夜の情景を額田は頭の中で描き出し奔放な想像力を駆使して作り上げたのではないか。文学は写実ではない。豊かな空想の力を借りてこそすぐれた芸術が生まれる。啄木が東海の小島の磯で実際に小蟹とたわむれたかどうか。

古代は謎に満ちている。聖徳太子の「湯の岡碑文」の故事も当てにはならない。推古四年、太子が道後の湯に浸ったときの至福をうたった碑文が伊佐關波の岡にあるというのが「伊予国風土記」に出ており、伊佐關波神社の石段の左側や裏山あたりなど発掘を試みたらしいが何も見付かっていない。

「熟田津」「湯岡碑文」と並んで伊予国を代表する叙情詩的な伝説に、軽太子と軽太郎女の心中事件が



姫原にある軽神社



比翼塚(姫塚)

ある。これは古事記に詳細に記述されており、信憑性が高い。次期天皇に決まっていた軽太子は同母妹の軽太郎女の美しさに憧れタブーを犯した。みづから権力者たることを捨てた軽太子は糾弾されて伊予の湯に流刑になる。しかし、古来から神聖な湯と尊ばれた道後の湯へ流罪人を送りこんだというのはどうも腑に落ち

ない。

古事記と日本書紀の記述の中には同じ事件を扱っていても大きな距たりに見える。伝承ほど不確かであるにすぎないものはない。

松山市姫原のバス停を降り五百米ほど行く中に「軽神社」があり、二基の五輪塔が睦まじげに並ぶ「比翼塚」に出会えた。この土地の住民が

二人を哀れんで供養を続けてきたさうだから、伊予は父祖代々、大らかで心優しい人柄の国なのだろう。松山市内のロシア人墓地で毎年、慰霊祭が行われているのもその例だ。

「熟田津」が伊予のどこであるかと私は一向に構わない。結局、「歴史」とは、後世の人間の手によって作られる「物語」にすぎないのだから。千幾百年もの昔、悠久の歴史の波間に埋没してしまった他人の生を実証することはどだい無理な話である。自分の人生だって、あやふやな思い出せない空白の時間があるではないか。

北条市から松山行きのJRに乗ると電車は和氣、三津の海岸線に添ってひた走る。この平和に風いだ「熟田津」の海を見る度に私は感情的解放を味わい、原始人に戻っていくような幸福感に包まれる。女性中心の沢山の伝説を持つ愛媛はその名の通り、やさしい媛の国なのである。

きくち・さき 文芸誌「アミーゴ」主宰。愛媛県生涯学習推進講師。北条市在住。六月、九月、五月、えひめ地域エンパワーメントカレッジ(えひめ女性財団主催)南予地区の講師を務める。